

## 審査の結果の要旨

氏名 マテオーバピアノ イデリナ ブエノ

本論文は、街路空間に求められる特性について、歴史学的方法論と消費者行動学的方法論の両面から調査・分析するとともに、街路空間の計画や設計の上で今後のあるべき方向性について考察したものである。

街路空間そのものは、人類の歴史とともにあるといっても良いほど長い歴史を持ち、その中では単なる交通機能ばかりでなくその時代と地域の特性を負った多様な機能と文化とが担われてきた。近代街路の構造的特性、すなわち、歩道と車道の構成、街路樹、排水勾配、路面舗装、線形設計と都市空間におけるネットワーク構成、沿道建築物との関係性など、の基本的構成の多くは、古代ローマ帝国において既に大局が定まったものとなっており、19世紀以降、細部の技術的要素や自動車の登場に伴う機能向上について進歩も含めて、その多くがヨーロッパやアメリカなどに西洋諸国によるものであった。わが国を含めたアジア諸国においても近代化とともに、こうした近代街路の計画思想や設計思想が導入されてきたが、アジア古来の人と街路の関係性や気候風土の特性までは必ずしも十分な配慮がなされてきたとはいえないのが実情である。

本論文は、こうした状況認識に立脚して研究の問題設定を行い、比較歴史学的方法論と消費者行動論的方法論の二面から、アジアにおける街路空間の特性を図ることを目指した研究である。本論文の主要部は、序論部と結論部のほかに、次の4つのパートによって構成されている。まず、非移動行動(論文中ではNMA: Non Movement Activities)を含めた歩行者の特性と空間計画及び設計への要請に関する既往研究の体系化とその中でのアジア都市の特性分析を行った第1部、江戸期の東京(江戸)とスペイン統治下のマニラを対象に浮世絵などの絵画や写真の計量分析にベースを置いて街路への諸要請とアジア的特性の抽出を意図した第2部、現代のマニラとバンコクを対象にして実施した利用者調査の結果を分析し歩行者の現代的な要請を数値的に把握することを意図した第3部、そうした知見を取りまとめた上で、アジアの現代的街路または歴史的地区の街路に求められる計画上・設計上の諸特性を取りまとめ提示する第4部となっている。

まず、第1部の総論部では、アジアとヨーロッパの街路空間の構成要素とそれを支える理念を整理するとともに、古今東西の「文明論」を参考にしながら、共通する基本要請と地域によって差異のある諸特性を区分けし、両者の関係性を考察している。そこでは相当数に及ぶ広範囲の文献がサーベイされ、この分野における高品質のレビュー論文として仕上げられている。この部分を筆者が取りまとめた審査付論文に関しては、特に「森林文明」と街路の計画・設計の関係性を述

べた点が高く評価され、2005年のアジア交通学会優秀論文賞が授与されている。

第2部のビジュアルメディアの分析部では、亜熱帯・温帯のモンスーンアジア的要素が一時期隔離的に保存されていたはずの地域サンプルとしての江戸と、逆にスペインの植民地として、ヨーロッパ的な計画思想と設計要素が導入され、それがアジア的な気候風土の中で変容・融合していったはずの地域サンプルとしてスペイン統治下のマニラが取り上げられている点と、街路風景を扱った多数の浮世絵や写真などのビジュアルメディアに描写されている、種々のハードアイテムとともに画面上に登場する人と人の関係性などが頻度分布など数値的に比較分析されている点が、大変ユニークな方法論となっておりまた興味深い結果をもたらしている。分析結果の一例を挙げる。両地域に共通するものとしての非移動行動(NMA: Non Movement Activities)の頻発性と多様性、高密度性が挙げられ、これこそがモンスーン気候に支えられた豊穡な風土と人口をもったアジアの最も重要な要素であると結論つけられている。逆に、登場人物の間に eye-to-eye コンタクトが顕著なマニラとそれがほとんど見られない江戸の特性が発見され、著者はそれを西洋的な一神教的カルチャーの影響の違いと考察している。

第3部の利用者調査では、街路の計画・設計のニーズの高い東南アジアの都市が取り上げられ、歩行者を対象としたインテンシブな意識調査が行われ、第2部で歴史的に得られた街路の歩行者空間要請に関する諸仮説を現代において検証・確認するとともに、新たな時代要請を抽出するため、AHP(階層的意思決定理論)による数量化と分析が行われている。多くのアジア的要請が今もなお、アジア諸都市の街路空間には強く求められていることが検証されるとともに、同時に自動車からの安全上・環境上(排気ガスや騒音)のプロテクションや防犯上必要とされる照度など新たなニーズが明らかにされている。

第4部では以上の知見が、街路の計画上・設計上の要請としてとりまとめられるとともに、一部については著者の設計アイデアとして具体的に提案されている(例えば交差点空間の改善プランなど)。

以上が本論文の概要であるが、アジアの街路空間を歩行者側面に立ってしかも比較歴史学的に分析した研究の方法論と内容は極めてユニークなものといってよく、今後さらに検証が必要な課題やさらに深度化すべき課題が少なくないとはいえ、提出論文は博士論文の成果として十分なものがあるものと審査員一同判定する次第である。また、論文審査時に行われた社会基盤学一般に関する口頭試問においても、提出者が十分優秀な成績であるものと判断された。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。